

リュウキュウムカシキョン（左）とリュウキュウジカ（右）化石骨格

自然展示室（常設）の開設について

館長 大城徳次郎

当館はここ数年総合博物館としての役割を果たすべく努力してきましたが、人文系に対し自然系展示のおくれが目立ち、その充実に重点をおき今年5月から自然展示室を開設に向け鋭意準備を進めているところであります。

本県は日本の最南端に位置し、亜熱帯性湿潤気候で、多くの島々からなる特異な自然環境にあることから、ノグチゲラ、イリオモテヤマネコなど世界的にも貴重な生物が多く生息しており、学術的に注目されている地域であります。また昨年の暮れにはヤンバルクイナが発見されたことによって、沖縄が生物の宝庫として、一段と脚光をあびることになりました。

このような地理的条件を反映して、当館に自然展示室を設置して欲しいとの要望が強く、それに応え

るため現在5月オープンに向けて池原貞雄琉球大学教授をはじめ、県内中・高・大学の諸先生方にご協力をいただき展示準備を進めております。

今後とも自然系展示に力を入れ総合博物館として充実をはかりたいと考えておりますので、多くの方がご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

なお今回開設する自然室は170㎡しかなく、沖縄の自然を十分に紹介するにはきわめて不十分ではありますが、当館の展示施設能力では最大の努力をしたつもりであります。

さいごに自然室の開設にあたり、県内外のみならず、特に児童・生徒が日頃の学習活動に活用していただければ幸いです。

特別展「沖縄の美」展 大盛況のうちに閉幕！



開会式

東京にある日本民芸館（昭和11年10月開館）所蔵の沖縄の美術工芸品一千余点のなかから漆器・陶器・染物・織物などの代表作品五百余点を選んで、昭和56年10月17日から11月15日までの30日間、特別展「沖縄の美—日本民芸館蔵—」（併催・戦前の沖縄写真展）を開催した。同展は沖縄県・沖縄県教育委員会・当博物館・日本民芸館・沖縄タイムス社の共催によって実現した。

沖縄の優れた美術工芸品が40余年ぶりに里帰りとあって、開会以前から関係者をはじめ、多くの一般県民が深い関心と期待を寄せていた。開会すると初日から多くの入場者がつめかけて熱心に鑑覧し、郷土の美に酔いしれた。全会期を通じて58,308人の総入場者を数えた。

展示会の主目的としては、まず、明日の伝統工芸の発展と創造に寄与することと、次代を担う青少年をはじめ多くの県民に鑑覧の機会を与え、誇りと勇気を抱かせ、興味と関心を持せることにあった。

一方、併催した「戦前の沖縄写真展—昭和10年代の風物—」は、沖縄の美展の準備期間中にあらたに確認された故坂本万七氏撮影の700余枚の写真原版から、動きのある人物を中心に選定して会場構成をした。

写真家坂本氏は昭和14年、柳宗悦氏を団長とする沖縄民芸調査団の一員として来島している。二度目の沖縄旅行は昭和16年に実現しているが、この二回にわたる来島により、県内各地の風物を精力的に写真撮影を行なった。

沖縄は戦争ですべてのものを失ない、かつて栄えた琉球王朝文化をしのぶには、戦後の変貌ぶりはあまりにも激し過ぎた。そこで古き良き時代

が鮮明な写真となって再びよみがえったとき、人人の感動がいかに大きいものであるかをこの写真展で具体的に知ることができた。

一方、当博物館に保存されている昭和15年1月に撮影された「琉球の風物」、「琉球の民芸」の二本の映画フィルムをビデオにダビングして、二階ロビーの一角に設置した。会期中、ビデオの前はいつでも人垣で埋っていて、とても人気があった。

なお、最後になってしまったが、同展開催にあたっては、日本民芸館のご好意と全面的な協力をいただいた。その外、後援・協力団体、多くの関係者の援助に対しても、厚くお礼を申しあげるしだいである。



展示会場風景

中国皇帝直筆の拝領

渡名喜明

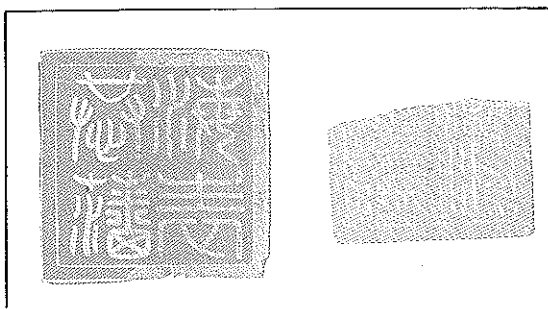
当館に「御書院御物帳」という古文書がある。首里王府が所蔵していた中国、日本の書画の目録である。掛軸、巻物、手鑑の順で記録されているが、掛軸の項は清国康熙帝から尚貞王に下賜された直筆「中山世土」に始まり、以下「輯瑞球陽」、「永祚瀛壖」、「海邦濟美」、「福」と続いている。

これらの直筆が琉球国王に下賜された経緯は、『中山世譜』、『球陽』などで知ることができる。それによると、「中山世土」は1683年（康熙22、尚貞15）、冊封使汪楫、林麟焯によってもたらされ、欽賜されたものである。直筆拝領はこの時に始まる。拝領は福建州靖南王の叛乱に際して、琉球側が靖南王の招諭を蹴って、清国に忠節の礼を尽くしたことによる。

以来、清国皇帝代替の際には、皇帝直筆が下賜されることになった。「輯瑞球陽」は雍正帝から尚敬王へ与えられたもの（雍正1、尚敬11、1723年）であり、「永祚瀛壖」は乾隆帝から尚敬王へ欽賜されたもの（乾隆2、尚敬25、1737年）である。「御書院御物帳」にはないが、1800年（嘉慶5、尚温6）には嘉慶帝の直筆「海表恭藩」が、冊封使趙文楷、副使李鼎元一行によってもたらされている。これらの直筆は、皇帝登極慶賀の使者に北京で託されるか、冊封使が持参するかのいずれかであった。

皇帝即位以外に、直筆が下賜されたことがある。これは皇帝長命を賀してとくに下賜されたもので、「海邦濟美」（乾隆49、尚穆33、1784年）がそれである。その返礼を兼ねて北京に上った進貢使には、さらに直筆「福」の字が琉球国王宛託された（1788年）。

直筆拝領の返礼には「金鶴」を献上するのが、「中山世土」以来の慣例であった。ところが、「海邦濟美」拝領の返礼として旧例通り、金鶴を献上しようとしたところ、薩摩から「待った」がかかった。金銀を異国へ持ち出すのは「天下の御大禁」であるから、代りの品にせよというのである。これに対して琉球側は、琉球には「織物器物類」などは産するが、金鶴に相応するほどのものは考え



「海表恭藩」の印

つかないこと、乾隆帝即位の際、尚敬王に直筆欽賜があったから、尚穆王は拝領できるはずのないところを、皇帝長命により特別に賜ったものであること、慣例を破ると礼節を重視する中国側では受け取らないかもしれないなど、いくつかの理由を並べて、慣例通りにしてもらおうよう要請している。伊地知貞馨の『沖繩志』（1877年刊）によると、「冊封謝恩使ノ時」にも金鶴が献上されているから、皇帝直筆拝領は、国王冊封に準ずる位置づけがされていたことがわかる。

『中山世譜』や李鼎元の『使琉球雜録』を見ると、「中山世土」以外はいずれも扁額をあわせて拝領している。ところが、王府直属の絵師が皇帝直筆の扁額作製に関わっている記事が、彼等の家譜にある。たとえば、石嶺親雲上传福は、1739年9月に「永祚瀛壖」の「御額仕立」、島袋筑登之親雲上（張忠令）は1799年12月に「福之字御額仕立」の主取を勤めている。また、知念筑登之親雲上昌俊も「御筆御額」を「彫調」えた件で、1783年に上布一疋を賞賜されている（「楊姓家譜」）。拝領品以外に扁額を作製する慣わし、あるいは理由があったかもしれない。なお、知念は直筆の表具も行なっている。

当博物館に篆書で「海表恭藩」と彫られた石製の印章がある。1947年2月に、尚家跡（現博物館敷地）から掘り出されたもので、印面が3分の1ほど欠損している。歴史学者の東恩納寛惇は、この印章は国学創建後、進貢使の一員に託して、中国で彫らせたものであろうと述べている。彼は、「海表恭藩」が「守礼之邦」と同意義で、「海邦養

秀」と並ぶ郷学の指針であったと述べている。しかし、「海表恭藩」に限らず、「中山世土」から「海表恭藩」に至るいずれの直筆も、琉球国の永続や繁栄を願う意のものであり、その意味で琉球国そのものの「指針」あるいは方針であったと見なすことができるだろう。^{註8)}

註

- (1)「琉球館文書」(『那覇市史』1巻の2、P190)。『中山世譜』巻8(『琉球史料叢書』4、P123)。
- (2)仲吉朝助「古老集記類二」(『近世地方経済史料』第10巻 P373)。
- (3)「琉球館文書」(前掲書同頁)。

- (4)『沖繩志』P157。なお、「福」字の返礼としては「金亀」が献上された(『歴代宝案』第2集)。「海邦済美」の返礼が金鶴だったからだろうか。
- (5)比嘉朝健「琉球歴代画家譜上」(『美術研究』第45号 P24)。
- (6)同上「同下」(『同上』第48号 P30)
- (7)東恩納寛博「海表恭藩について」(『琉球』第1号 P6~7)。
- (8)なお、「海表恭藩」以後の御書扁額拝領は「屏翰東南」(1822)、「弼服海隅」(1838、ただし御書のみ)、「同文式化」(1852)、「瀛嶼屏藩」と続くが、本稿の結論に変わりはない。(当館学芸員)

昭和57年度博物館文化講座

時間 ▶ 午後2時30分~4時30分
会場 ▶ 当館講堂

| | | |
|-----------------|-----------------------------------|---|
| 4月17日⊕ | 民俗芸能の話 | 宜保栄治郎(教育庁文化課主幹) |
| 6月26日⊕ | 沖縄の野鳥をたずねて | 友利 哲夫(本部高校教諭) |
| 7月31日⊕ | 昆虫の野外観察 | 長嶺邦雄他(沖縄昆虫同好会) |
| 8月8日⊕ ・15日⊕ | 陶芸教室 | 宮城 勝臣(陶芸家) |
| 9月4日⊕ ・5日⊕ | 久米島の史跡めぐり | 名嘉正八郎・上江洲均・知念勇 |
| 9月25日⊕ | 宮古上布の話 | 大城志津子(琉球大学教授) |
| 10月16日⊕ | <100回記念> 博物館の歴史展示について 沖縄の地名 | 坪井 清足 (奈良国立文化財研究所長) 名嘉 順一 (那覇商業高校教諭) |
| 昭和58年 1月29日⊕ | 考古学よりみた南島の葬制について | 当真 嗣一 (教育庁文化課主任専門員) |
| 2月26日⊕ | 琉球の位階制度 | 宮里 朝光(城東小学校々長) |
| 3月26日⊕ | 沖縄の食制について | 金城須美子(琉球大学助教授) |

第5回移動博物館

会期 昭和57年5月22日(土)~5月23日(日)
会場 伊江村中央公民館
展示会 文化講座・映写会及びビデオ放映

第6回移動博物館

会期 昭和57年5月28日(金)~5月30日(日)
会場 本部町立博物館
展示会 文化講座・映写会及びビデオ放映

昭和57年度企画展

○新収蔵品展

5月11日(火)~7月4日(日)

○沖縄の昆虫展

7月27日(火)~8月29日(日)

○金石文拓本写真パネル展

9月7日(火)~9月26日(日)

<特別展>

○熊本県・沖縄県交流展

10月30日(土)~11月28日(日)

○特別講演会

10月30日(土)午後2時~5時

講師: 細川護貞

(細川家17代当主・永青文庫顧問)

演題: 「永青文庫と細川家」

講師: 乙益重隆(国学院大学教授)

演題: 「考古学上からみた熊本」

沖縄県立博物館だより No.12

発行年月日 昭和57年3月31日

編集・発行 沖縄県立博物館

住所 〒903 那覇市首里大中町1の1

TEL 0988-86-4353

84-2243